
異形の羽

青龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異形の羽

【Nコード】

N4948K

【作者名】

青龍

【あらすじ】

涙が流せないのです。

あたしは、感情が欠落しています。

好きな人が

その人 pensando すら、あたしは、泣けない。
愛する人を持って尚、僕は。

君と過ごした日々（前書き）

あたしは君が好きです

たしでき好が君はしたあ

あたしは君が大好きです

たしでき好大が君はしたあ

S u n t r a s c o r s o c o n v o i

その証を今ここに

君と過ごした日々

君と出会ったのは小学校三年生の時。

その時は君の事、『反応の面白い人』くらいにしか思ってた。なにより、君じゃなくて、他の子を見てたんだ。他の子が好きだった。君じゃない、別の子。

あたしは、好きな子なら、幼稚園の頃からいた。毎年毎年変わってたけど。

君と会った年も、例外じゃなかった。

四年生に上がって、その子とクラスが変わったのも手伝って、何も無く、何事も無く、また片思いが終わった。

想いが自然消滅するのはいつもの事だった。『好き』なんて、そんなものだと思っていた。その程度のものだと、思っていた。熱しやすく、冷めやすいあたしだから、こんなものだと。

今年もまた、勝手に好きになって、勝手に好きじゃなくなるんだ。わかってた。

でも、違った。

きつと、友達だけで満足だったんだ。今までと違って、四年生の頃は仲良くしてくれる女の子が数人、ちゃんと居てくれたから。

友達と呼べる友達が、ちゃんと居たんだ。

そして、君も。

君も、同じクラスだった。

あたしは君をからかって遊ぶのが好きで、君の青い筆箱から消しゴムを一つ抜き取って

「返してほしかったら取ってみな」

なんて言ってた。

学校の外でも、君の野球帽を取って同じ台詞を言っただけ、あたしより背が低かった君は助走で勢いをつけて跳ぶんだけど、あたしにかわされて、何度も同じ事を繰り返す。

「ぬまってばワンパターンなんだよ！」

あたしが言ってもやる事変えないし、めげないし。帰る時間になつて帽子を返すと「ありがとう」って必ず言うの。あたしが返さず、君を困らせてただけなのに。

君は友達だった。少なくともあたしはそう思っていた。

あたしは君が大好きだった。『友達』としての、大好き。

別に特別な意味なんて無かった。あたしの中で『好き』と『大好き』は、使う相手が違ったから。

『大好き』って思える程強く、人を好きになんかなってなかったから。

他の人よりちょっと『好き』位にしか、人を好きになっていなかったから。

君への、『好き』の気持ちも初めはそうだった。

五年生に上がって、また君と同じクラス。正直嬉しかった。

この時はまだ、君への恋心なんて、気付いていなかったけれど。

大好きな友達とまた同じクラスなんだ、って、思った。だから、嬉しかった。

君と同じ。君と一緒に。それが、なにより嬉しかった。

テストの点数が同じ。間違った問題が同じ。こんなバカみたいな、些細な事も嬉しかった。

あたしと君は、ライバルみたいな関係でもあって、

君に勝てるついで、ぴよんぴよん跳び回ったり、君の肩や背中を何度も叩いたりしてた。

反対に、君に負けると悔しくて、唇を尖らせて睨んだり、八つ当た

りに、同じく君の肩や背中を何度も叩いたりした。そんな時、君は気弱に苦笑いを浮かべながらあたしを許してくれるの。

君はあたしに甘い。否、君は女の子に優しい。けれど、男子に厳しい訳ではなく。誰にでも、優しい。

この頃だろうか、君の事を『好き』になったのは。君の事を、親しみと好意をもって「ヒロヤ」と名前で呼ぶようになったのは。

五年生の一学期、君の事を名前で呼ぶようになって、君への気持ちに気付いた。

毎日が本当に楽しい時だった。

週に一度、君と、君の友達が野球をするのを見に行く。中にはあたしを鬱陶しく思ってる人も居たけれど、あたしの目的は君を見る事。人の事なんか気にしていなかった。

一学期が終わって夏休み、しばらく君に会えないな、寂しいな、そんな事はその時、一切無かった。七月中は、学校のプールで会うつし。夏休み中だつて最低でも二日、君と過ごす事が出来たから。林間学習。君の手を引いて、君と言葉を交わしながら登り進める山道はとても楽しかった。

「登山なんてやる気があれば楽勝だよ！」

なんてそれっぽい事言つて、急になる坂と視界を曇らす霧の中、君の手首を握って進むあたしの耳に、偶然入った友達の言葉

「沼崎の気持ち考えてないよね、あれ」

君の気持ち。手を引くあたしを鬱陶しく思っているか、もうむしろ感心して付いて来てるか、あるいはまた違う心境だったかなんてあたしには分からない。友達が言つたとうり、あたしは君の気持ちなんか考えていなかった。いつもみたいに流されるままな君があたし

の言動に拒否反応を示すなんて考えた事も無かったから。

あたしは君の事何も考えて無かったんだ。

そう思つて、友達の横を走つて通り過ぎた。君の手を握つたままに友達の言葉にムカつきと恥を覚えての行動だった。

——貴女よりは考えてるし、わかつてるつもりだ。——

言いたかった。けど言えなかった。言える余裕がその時のあたしには無かったから。

夏休み明け、あたしはまた毎日君に会える事が淒く嬉しかった。

——嬉しかった。嬉しかったよ。今思えば、夏休みなんか明けなくてよかったんだ。君の事をずっと想つていられたし、宿題なんかに追われなくてすんだし。なにより、君に睨まれる事なんか無かったよ。君に拒絶される事なんか、無かったじゃないか。嗚呼、何故…何故君は僕を睨むの…何故君は僕にそんな言葉をかけるの…嗚呼…痛い、苦しいよ。君の事が好きただけなんだ、僕は。また一緒に笑つてよ…また一緒に遊んでよ…また一緒に本を読もう…君の邪魔はしないから…。わからないよ、僕にはわからない。君が僕の事を避ける意味がわからないよ。

「——変わったから」

わからない…君の口から聞きたい、人づてに聞いた言葉なんか信じたくない…あたしが変わったから…？聞かせてよ、何が変わったの…やめて…あたしの前でその子と仲良くしないで…どうして…？どうして…！あたしは変わったつもりなんか無いのに…わかんない…君がわかんないよ…嗚呼、僕はやっぱり君という人を理解なんかしていなかったんだね。

つもり、じゃダメなんだ。つもり、じゃ…わかった事にはならないんだ。嗚呼、そうか。そうか。ダメだね、僕は。情けない。実に——。

『口を利く事くらい出来ただろう。』

『それが叶ってればこんな思いはしていない。』

『叶えなかったのは自身じゃないか』

『叶わなかったんだよ』

『勝手に諦めたんだろっ』

『あの眼を見たくなかったんだよ』

『あの眼とも、向き合わなければならぬ』

『僕は逃げた。だから一切口を利けなかったんだよ』

『だから、次は逃げてはいけぬ。』

—— 絶対に。』

ここに断言してみせよう。

あたしの、未だ、たった13年間の人生で、小五の一年間は、1番
有意義で、かつ1番息苦しく、過ごし難い一年だったと。

追伸

さてさて、まあまあ。

前回はあんな断言で絞めてしまったばかりに、小六の思い出話が出来なかったが、まあ特にこれと言った弘也との思い出は無い訳で。

だって当たり前。

五年の二学期後半からこっち、弘也とはろくに口を利いていない。ろくに？むしろ全くだよ。

六年に進級して弘也とクラスが離れた。悲しかったけれど、その反面、僕は安心していたんだ。

「名前で呼ぶな」

そんな拒絶以降、ずっと僕に向けられていた氷のように冷たく、矢のように鋭い君の眼に睨まれなくてすむ。君の眼を見なくてすむ。って。

でも、そんなものは日常的にというだけで、廊下ですれ違いしなに手洗い場で偶然鉢合わせて、君に会ってしまえばその眼は結局僕に向けられるんだ。

安心、か。バカだよねえ、実に。

小学六年の一年間是最悪だったよ。

弘也との仲がこじれてから仲良くなった男子も弘也と同じクラスであたしのクラスの担任は超面倒臭い人だし、クラスに仲のいい子なんてほとんど居なかった。

いちいち問題ばかり起こしやがる馬鹿女共と同じクラスで、弘也と同じクラスじゃないなんて、あたしのストレスは溜まる

ばかり。

たまのストレス発散は、久しぶりに同じクラスになった、あたしが好きだった子にちよっかいを掛けて遊ぶ事。

その子の筆箱は弘也と同じ青い筆箱で、それを見る度に、弘也の筆箱は色鉛筆も入ってたから膨れてたんだよなあ、弘也の筆箱は沢山キーホルダーが付いてたっけ、等と考えてしまう。

ああ、本気で惚れてんだな。

性に合わないけど、そう思う事はあった。

小学六年の一年間是最悪だったよ。

小学六年の一年間は最高だったよ。

最高にイライラして最高につまなくて最高に無意味で最高に最低最悪だったさ。

君と最後に言葉を交わしたのは卒業式前日。

この日は卒業アルバムが配られて、昼休みから放課後にかけて大騒ぎだ。

表紙、裏表紙の裏面、綺麗な黄色い紙が貼られた空白。

「ここになんかメッセージ書いて!」と、ペンとアルバムを手渡される。

たいがいと同じ中学に進む子だったから、そんな気なんか無いけれど「中学でもよろしく」平淡にそんな事を書いただけだった。

あたしは、片っ端から人に頼んで行くななんてしなかった。どうせ、

一部を除いて皆書くことは「よろしく」

よろしくする気が無い人からそんなメッセージを受け取る気は無い。ただ、消極的に動き過ぎて、欲しい人から貰えなかったが。実際問題、仲良くしてもらってるから問題は無い。

受験に合格して他の中学へ進む幼馴染みからは、ちゃんとメッセージを貰ったし。

騒がしい放課後が静まり始める。

全然全く静かでは無いが、溜まっていた生徒が帰宅し始めたのだ。君はまだ残っていた。

先生を数人が囲んでいる、その一人だった。

あたしは、どうしても最後に、君の、あたしへの声が聞きたかった。君からの言葉が欲しかった。

手に持ったアルバムを一度、ギュツと力を込めて握り、君に後ろから静かに近づいた。

けれど、名前で呼ぶなと言われていた手前、「弘也」と声を掛ける事は出来ず。しかし、「沼崎」と呼ぶのは何故か抵抗があった。

結局、君の肩を二回程つついた。結局、と言ったが、しょうがなくの最終結論では無い。

君に触れる事など、もうないと思っていたあたしにとって、肩に微かにでも触れるという事は、声を掛けると同じ位、勇気のいる事なのだから。

振り返った君は、視線の先に居たのがあたしという事に驚いたように一瞬目を開き、微かに怪訝そうな表情になる。

あたしは少し言葉に詰まりながらも、目的の言葉を発する。

「何か、書いてくれない…?」

アルバムを差し出すと、「いいよ」と言って、ペンとアルバムを受け取る君。

えっ…、と声が漏れそうになるのを抑えて、少し呆気に取られた。そうしてる内に書き終えて、ペンとアルバムをあたしに返す君。

「あ、ありがとう!」

「じゃあ」と、先生との話しを終えて、帰り仕度を始めた友達を追うように去って行った君。

叫びたい程嬉しくて、そのまま廊下にしゃがみ込んでしまいたい程嬉しくて、たった二言の、君の声が頭の中を渦巻いて、君に触れた手と、アルバムを握り絞めた。

君が廊下を折れて見えなくなってから、思い出したようにアルバム

を開いた。

《中学でもがんばれ!》

受験に合格した君は居ない。そんな中学は酷く退屈だろう。そう思っていたけど、君のメッセージで頑張る気になれた。

そのメッセージが例え上辺だけの言葉だとしても、君の筆跡がここにある事がとにかく嬉しかった。

君という存在が、あたしと一緒に居てくれたという証。

ああ、本当に、本気で、

弘也に惚れてんだな、あたし。

改めて、また、そう思った。

柄にもなく、また、そう思った。

君の無い一年間

3月28日。

惜しくも悲しくも名残惜しくも、無く、

実にめでたく、一年一組解散。

「いややー終わりたくないー!」

「このクラスのまま持ち上がりがいい!」

そんな事を喚く奴もいたけれど、実にどうでもよい。

「1ー1で良かった!」

「35人の思い出最強!」

後ろの黒板に綺麗な字で書かれたメッセージ。

は?

あたしはこのクラスで良かったと思った事なんざ無い。

思い出最強?最凶の間違いだ。

終わりたくない、終わりたくない、終ワリタクナイ?

うぜー。

あたしはむしろ、さつさと終わってほしかった。この面倒臭く、鬱陶しく、うるさく、アホらしいこのクラスが、早くバラバラになつてほしかった。

問題しか起こさないこのクラスの何が良かったんですか?

あたしには到底理解出来ない。無論、理解しようとも、思わないが。あたしが帰りの挨拶後、真っ先にした事は、あの不愉快なメッセージを消す事だった。

日付の回りに書かれたそのメッセージらはしぶとく、一度黒板消しを被せただけではまだ跡が残った。

ああ、鬱陶しい。

舌打ちをして再度黒板消しを字に被せる。日付諸とも綺麗さっぱり消してやった。

意味の無い一年がやっと終わった。そんな気がした。否、すでにし

ていた。

小学生の時よりさっぱりと、淡々と、実にあっさり、さっさと終わった終了式から、すでに、終わっていたんだ、あたしの一年は。未練も悔いも無く。

否…本当に、未練も悔いも、無かっただろうか…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4948k/>

異形の羽

2010年10月8日23時59分発行